

平成 28 年度 入学試験問題

国 語

(第 2 回)

[注意]

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入しなさい。
3. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
4. 問題冊子の余白等は自由に使って構いません。
5. 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学附属中学校

【注意】国語の問題では、字数制限のあるものは、特別な指示がない限り句読点等も一字に数えます。

1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

地域猫^{なま}という発想や活動が最初に起こったのは、横浜市磯子区だという。

一九八〇年ごろ、獣医^{じゅうい}であったある人物が保健所に配属され、野良^{のらいぬ}犬や野良猫が地域を徘徊^{はいかい}する日常を経験した。まず野良犬の管理を進めた結果、地域住民の注目は野良犬から野良猫へ移っていったという。そのころから野良猫のフンに関する地域住民の苦情が目立つようになり、野良猫をいかに管理するかという「問題」が浮上してきたのだ。

猫をどのように管理すれば、地域住民も苦情を訴^{うった}えることなく日常を過ごすことができるだろうか。仮に、街を徘徊している猫をすべて捕^{つか}まえて殺処分したとすると、犬では考えられなかった問題が起きることになる。

犬の場合、誰^{だれ}かが飼っているということは、たとえば首輪などによって明確にわかり、野良犬との区別がつきやすい。しかし猫の場合、確かに首輪をつけている猫もいるが、飼い猫かそうでないかは、なかなかわかりづらいのだ。とすれば、飼い猫が捕まえられ、殺処分されてしまうという問題が起きてもおかしくない。

地域猫を発想した人物は、野良猫問題が起きるのは、地域住民がもっている中途半端^{ちゅうはんぱ}な猫愛護意識のためだという。

通りにいる猫を見かけると、かわいいそうだから、あるいはかわいいからという理由で、思わずエサをやってしまう。その猫を生かすための安定した行動としてのエサやりではない。その場合の A 愛護意識^{あいごいしき}の発露^{はつろ}であり、ネコがそのとき空腹であるかどうかなどは関係ない。その結果、食べ残しのエサが腐敗^{ふはい}したりして臭^{にお}いが問題となり、生活環境^{かんきやう}をめぐるトラブルのもとになってしまう。

もう一つの問題は、結果的に飼うのに飽^あきたり、猫の子どもが増えたりすると、猫を捨ててしまいう人がいるということだ。

仮に、私たちがそれまで飼っていた犬と猫を捨てるとして、どちらの行為^{こうゐ}により抵抗^{ていこう}を感じるだろうか。どちらも問題であることは間違^{まちが}いないが、おそらく猫を捨てる行為のほうが、抵抗を感じる方が少ないのではないだろうか。ここに、私たちが日常であまり意識することなく抱^{いだ}いている、猫^{ねこ}をめぐる了解^{りようかい}の仕方^{しつぽう}が潜^{ひそ}んでいるように思う。

どのようなしたら強制的に管理することなく、猫も人も地域で暮らすことができるのだろうか。その人物は、当時ある団地で行われていた活動（団地を徘徊する猫をそれ以上増やさないで、猫たちが生きられるように、猫バザーを開き、その a シュウエキ^aで猫の不妊手術^{ふじんじゆつ}をしていた）に注目し、そうした実践^{じっせん}を手がかりに地域猫活動を発想していった。

地域住民に対するシンポジウムを開き、動物愛護と生活環境問題の解決をめざし、「人と猫の共

生」について合意形成をしてみたのだ。

結果として磯子区では、地域猫に関するガイドラインに「猫は排除はいじよするのではなく、命あるものとして」「飼い主のいない猫の数を減らしていくために」「猫の問題を地域の問題として、住民と行政が協働して」「猫が好きでない人や猫を飼っていない人の立場を尊重して」、この問題に取り組みと明示されるようになった（『磯子区猫の飼育ガイドライン』『地域猫』対策』）。

その後、全国的にさまざまな自治体で「地域猫」「公園ねこ」「街ねこ」など名称めいしょうは異なるが、地域猫対策や活動が、地域社会づくりのテーマの一つとして位置づけられているという。

※ 報告書では、東京都台東区谷中という、「猫の町」として有名な場所を詳細しょうさいに調査し、どのよう地域で猫が生かされているのか、人間と猫の共生ができていると言われるが、本当にそうだろうか、などといった関心から、地域猫の実際を検証し、そこにはさまざまな未解決の問題が息づいていること、^① けっして「人と猫の幸せ」が達成されているわけではないことを明らかにしている。

報告書の内容自体は、地域社会を考えていくうえでも興味深い。また、地域猫活動がもつ問題性を論じることも、とても興味深いものだ。

たとえば、地域猫活動の前提であり重要な核心かくしんは、それ以上猫を増やさないとことだ。だからこそ、猫に承諾しょうだくなく不妊手術をするのだし、手術を受けた印である耳カット（耳の一部をカットすること）のある猫を見れば、人びとは、ああ地域猫だと了解し、安心してエサなどを与あたえることができる。

しかし、動物愛護という観点からすれば、この核心的行為は当然批判されるものだろう。人と猫の共生をうたいながら、実際は地域で暮らす人々にとって都合のいいかたちで猫は生きている。それはあくまで人から発想され、猫に「強制された」共生のあり方ではないかというわけだ。

さて、学生たちの報告や議論を聞き、報告書などを読み、私はあることが気になった。地域でどのようにしたら猫が生かせるのか、その活動や対策を背後で支える理念や理想などは了解できる。でもなぜ猫なのだろうか。なぜ地域と猫なのだろうか。

確かに、猫という動物と人間との関係性の問題ではあるが、その議論からは「猫という存在しんざい自体がもつ意味がすっぱりと抜け落ちていくように感じられたのだ。言い方を変えれば、そうした意味についての了解は、議論や活動にとって「あたりまえ」であり、問う必要のない前提とされているのではないかと感じたのだ。

私は、地域猫活動の報告を聞き、猫という存在がもつ多様なおもしろさを思わずにはいられなかった。そのことについて少し書いておきたい。

まず思ったのが、猫がもつ人間に対するリスクの緩ゆるさということだ。

野良犬対策の基本は、狂犬病きょうけんびょうがもつリスクへの対応だ。猫は、私たちにとってそのようなリスクが高い病気を媒介ばいかいする存在ではないだろう。また、大型犬がもっているような暴力性も、猫には当てはまらないだろう。

また、猫は人間の所有物だろうか。仮に飼い猫としても、猫そのものは、飼い主の自宅や庭など、個人が所有している空間でのみ生きている存在なのだろうか。

そうではないだろう。部屋のなかにいると思えば、プライベートな空間をいとも **B** 超えて、他者の生活空間や公共空間に移動していく存在こそが、猫ではないだろうか。鎖でつながれている猫というのは、まず聞いたことがない。

つまり猫は、人間にとつてのプライベートな領域のみで生きる存在ではない。それは、仮に個人が所有し、そのしるしを猫に **b** キザンでいるとしても、軽々と個人の空間を越境し、他者の生活空間や公共空間を往還する存在なのだ。

言い方を変えれば、猫はつねに人びとの生活世界や私的領域に外から闖入し、侵害する危険性をもつ存在なのだ。ただその危険性は緩やかなものであり、私たちの日常を **c** コンテイから覆すようなものではない。とすれば、猫が自分の生活世界や私的領域を恣意的に横断していくとしても、それは許される範囲の日常の攪乱だといえるだろう。

いわば猫は、私たちの日常において、私的な部分と公的な部分の越境を繰り返す他者性をもつ存在といえるのではないだろうか。

そのうえで、動物としての猫がもつ活動範囲を考えてみると、実はそれほど大きな範囲ではない。谷中の墓地という一定の広さをもつ空間や、江の島という限られた空間など、私たちが普段「地域」として意識し、生きている空間のサイズにほぼ当てはまってしまっただろう。

つまり、猫とは、私たちが日常生活するサイズの空間である「地域」と、ほぼ重なる程度の活動範囲で動き回る存在であり、仮に個人が飼っているとしても、その個人のプライベートな空間や領域だけで生きている存在ではない。

猫はつねに私的生活空間を軽やかに横断し、公的な領域・空間も自由に行き来する。ただ、そうした自在な移動は、個人の私的な生活空間へのゆゆしき侵害、侵入を引き起こすことはまずなく、迷惑感を生じるものの、それだけで猫という存在をすべて否定し、排除しきれるものではない。

また、さらにいえば、飼い犬についてよくいわれるような飼い主への忠誠心という言葉は、猫には当てはまりづらい。どこかで人間の信頼を裏切り、**C** して、実際何を考えているのかもよくわからないままに、私たちの日常生活空間を移動する、「あいまいな他在」として、私たちの周辺で生きているといえるのではないだろうか。

とすれば、地域猫という発想は、確かに野良猫対策から生まれたものかもしれないが、個人の所有というところからはずれて生きている猫は、もともと「地域性」を体現している存在であり、この発想は、まさに猫という存在がもつ本質に由来するものといえるのではないだろうか。

猫が地域で生かされているとして、その「適切なかたち」とはどのようなものだろうか。

地域のなかで、お互い私的な生活空間を確保して生きている他者どうしとして普段出会い、生きていく私たちのありようや、関係の紡ぎ方を考え直す興味深い手がかりとして——言い方を変

えれば「もう一つの他在」として、^③ 地域猫の姿を批判的に捉え、地域猫活動の意味を反省的に考えることができるのではないか。

学生の話だと、地域猫活動が盛んなどころでは、他の場所に比べて、他者や他者が暮らしている日常への人びとの関心度がより高いという。トウケイ的なデータを示されたわけでもないの^dで、それが本当かどうかはわからないが、地域で生かされ、そこら辺を移動している猫への日常的な注意や関心ははらわれることを通して、地域で暮らしている他の人びとや、地域の現実やさまざまな問題への関心が醸成されていく可能性は、私にも想像できる。

地域で猫のことを考えるとしても、それは地域社会の存続にとって本質的な問題ではないだろう。でも、本質的な問題ではないからこそ、猫という「他在」の意味を考えることが、その地域の日常を緩やかに、のんびりと、あいまいな感じで考え直すことができる重要な^eキカイを、私たちに提供してくれているのではないかと思う。この「緩やかさ、のんびりさ」という余裕^{よゆう}は、実は地域を考えるうえで、大切な要件ではないだろうか。

(好井裕明『違和感から始まる社会学―日常性のフィールドワークへの招待―』より)

※報告書……筆者の勤める大学の学生による調査報告書。タイトルは『谷中は猫の楽園か―「地

域猫」にみる人と猫の幸せ―』。

問1 ——線 a、e のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 空らん A にあてはまることばとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 気のきいた
- 2 気をつかった
- 3 気やすめの
- 4 気まぐれの
- 5 気もめる

問3 空らん B ・ C にあてはまることばとして最もふさわしいものを次から一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい。

- 1 うずうずと
- 2 くよくよと
- 3 ひょうひょうと
- 4 てきぱきと
- 5 やすやすと

問4 ——線①「けっして「人と猫の幸せ」が達成されているわけではない」とありますが、筆者はその理由をどのように考えていますか。それが書かれている形式段落を一つ探し、はじめの五字を答えなさい。

問5 ——線②「私的な部分と公的な部分の越境を繰り返す他者性をもつ存在」を端的に表した十字以内の表現を文中からぬき出しなさい。

(問題は次のページに続く)

2 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

太平洋戦争が本格的になってきた頃、三宅一家が主人公一家の隣に引っ越してきた。三宅一家は東北生まれの三宅さんとアメリカ生まれの日系二世の三宅夫人、そして息子の順ちゃんの三大家族で、三宅さんの仕事の都合でアメリカやオーストラリアなどを巡った後、日本へと帰ってきたのであった。

主人公一家と三宅一家は戦争中、助けあって過ごし、強い結びつきが生まれていた。そんな中、三宅一家はアメリカに引っ越すことになり、十二歳の主人公は五つ年上で理想の男性である順ちゃんを泣きながら見送った。そして九年後、待ちに待った順ちゃんが日本へ帰ってくるようになった。

待ちに待った順ちゃんからの電報がきた時、私たちは玄関にいた。おねえさんは会社へ、私は学校にいくこうとして。

配達さんの手にあるのが、外国電報とわかったとたん、私は「わっ……」と声をあげた。

「おねえさん、来た！ 順ちゃんからよ！」

おねえさんは、私がさわぎたてる時のくせで、ちよつと眉をよせてみせ、そのくせ、配達さんには、あいそよく笑って、

「御苦労さま！」

電文には、「Arriving Saturday. PAA Flight I. Jun.」とあった。

「フライトIって、なんだろ。」と私はせきこんで言った。

「飛行機のナンバーよ。それで時間がわかるのよ。あたし、きょう、交通公社で聞いてみるわ。さあ、いよいよやってくるのね！」

静かな姉も、さすがに昂奮したように言って、私たちは、十月はじめのその朝、足どりも軽く駅にいそいだ。

その夕、おねえさんが帰って、順ちゃんの飛行機は午後十時十五分着とわかった。私には、それまでの二、三日が、ワクワクの連続だった。とにかく、順ちゃんといえは、私たちにとつては、まったくとくべつな存在だったから。

(中略)

順ちゃんのおつく日は、あいにく、霧がたちこめていた。爆音が大きくなったと思うと、もうその大きな飛行機は、滑走路を私たちの方へすべつてくるどころだった。

私は送迎の手すりからのりだして、窓だけ明るい飛行機を、じつと立っていられない気もちで見つめていた。① あの中に順ちゃんがとじこめられている！ すぐタラップが飛行機の胴中にくっついて、係員らしい人が、上ったりさがったりしてから、やっと乗客たちが、出口にあらわれた。一人出てくる毎に、どこかで声があがった。十五、六人めに、うす水色に見えるコートに、あさ黒い顔の青年が、照明の中にうきあがった。

「わア順ちゃんだ！」 間髪を入れず、私はどなった。

「およしなさいよ、そんな声だすの。まだよくわからないじゃないの。」

でも、私の声は、もうとまらなかった。だって、順ちゃんが、手をふったのだもの。

「順ちゃあん！」私も手をふった。

姉も声をかけた。いま、おとなりに住んでいる板倉さんの人たちも呼んだ。

順ちゃんは、タラップをおりてくると、うれしそうに笑いながら、私たちの足下まで来て、手をふり、それから、税関の中へ消えた。

私は、もうはアはアになって、姉の手をひっぱって、税関の出口の階段の上へまわった。

ジリジリする二十分がすぎて、検査のすんだ四、五人が出てきたが、その中に順ちゃんがいた！まあ、ダディーにそっくり、と私は思った。順ちゃんは、階段をかけあがってくると、そこに立ちならぶ人垣にぎつと目をさらし、笑顔でまっすぐ私のところへやってきて、

「ヤス！……」

「あら、あたし、とも子よ！」私は、ぎょうてんして言った。私の耳にも、私の声が悲鳴にきこえた。

順ちゃんは、正直にぱくつと口をあけ、

「え、とも子こんなに大きくなつたの！」というまに、順ちゃんの目は、私のななめうしろに立っている、ひつつめ髪のおねえさんをさがしあてていた。

「ヤス！」順ちゃんは、私のわきをすりぬけて、おねえさんの手をとっていた。

みるみるうちに、おねえさんの目に、涙がいっぱいにたまった。

もちろん、私には……、その時、おねえさんの頭を去来した、いろんな思いが、わかった。戦争のこと、両親の死、それから三宅家のさしのべてくれたあたたかい手。

でも……、同時に私には……、この再会のシーンは、シヨックだった。

おねえさんは笑って、すぐ涙を拭くと、順ちゃんを、かれが、これから同居する板倉家の人たちに紹介した。そして、私たちは、にぎやかに家に帰ってきた。

その晩、私はよく眠れなかった。

なんて思いがけない、へんてこなことになってしまったんだろ、と私は思った。私は、それまで勝手に順ちゃんを、私の[※]プリンス・チャールディングにきめていたんだ。順ちゃんは、^②眠り姫の私の目をさましに、日本にやってくるはずだった。それなのに……ことによったら、あの時、十七だった順ちゃんには、二十二のおねえさんが、初恋の人だったんじゃないかな……。

つぎの朝、私はいつもの日曜日のように、十時には、おふる場の裏にタイをもちだして、一週間の洗濯をしていた。万事、おねえさんのきめた時間割りどおりだった。順ちゃんが、首にスウェーターをひっかけるという軽装で、木戸の上から顔をだしたのは、十時半ごろだった。

「ハァイ、とも子！」順ちゃんは、きげんの良い笑顔で言った。

「おはよ！」しかし、私は皮肉をとばさずにいられなかった。「けさは、まちがえなかったわね。

よく眠れた？」

「うん、さつきまでぐっすり。だって、何十時間とんだんだ？」そして、木戸をあけてはいつてくると、「日曜に洗濯かい？」

「だって、きょうしなけりゃ、いつするの？」

私は泡あわの上にかんでいる下着類を、かれの目にとどかないところにつっこんだ。

「かわいいそうに。」と、兄らしく言っつて、「ヤスは？」

そら、きた！ と、私は思った。

「あつちよ。もうお掃除そうじすんだでしょ。」

順ちゃんも、またあとでねというような目顔で、庭の方へまわっていった。たちまち、茶の間の方角から、おねえさんの明あかるい笑い声がおこった。

それから、ああ、私③の世界に、なんとという価値のテントウがおこったのだろう。

私は、それまで、私の家の中心だった。なるほど、おねえさんは万事、家の中をきりもりして、寝ねるも起きるも、おねえさんのさしずどおりではあった。

「だって、少しでも規則的にやってエネルギー節約しなかったら、私の細腕ほせうでで私たちの生活もぢきれないわ。そのかわり、あなたが卒業して、自分で生活できるようになったら、あなたは、あなたの自由よ。責任もつて、あなたらしく暮らしてちょうだい。だけど、それまでは、おねえさんの言うこと聞いてね。」と、おねえさんは言うのだ。

私のために青春をなげうってしまったとも言えるおねえさん。頭をかつきりひつつめて、黒っぽい服を着て、おねえさんは、三十一になってしまった。「あなたと一しよに、私も結婚けっこんするわよ。」と、おねえさんは笑うのだけだ。

でも、なんとなく、私は、それがあたりまえの気がしていた。おねえさんは、私のためにあるような気がしていた。

それが、いま、完全にみそつかすなのは、私だった。順ちゃんは、形式的な板倉いとうらさんとの交渉をめんどくさがって、朝に晩に裏からやってきて、「ヤス、ヤス」の連発だった。理解者を得て、おねえさんが日に日に、明るくなり、若わかがえるのは、だれの目にもだつてわかった。

それにしても、順ちゃんも妙みょうな人だった。ちつともアメリカ式じゃない。少くとも、私たちのいうドライじゃない。むしろ、古風だった。おねえさんに対するサーヴィスなんかときたら。それは、おねえさんのコブ④である私にも、もちろん、やさしくはしてくれただけだ……、私がまん中になって歩いている時など、私の頭あたまごしにかわされる、たのしげな、したしげな会話を、私は何度がまんしくちやならなかつたろう。私は、時どき、心の中でみにくい悪罵あくばを二人になげつけたりした。

「三十一の女と二十六の男なんて、グロテスクじゃないの！」

私は、腹いせのように、私の卒業論文に熱中した。テーマは、「女子日雇労働者の労働状況^{ひやとい}」
それから、就職だって、自分の手で片づけてみせるから！ 私は、寒い十二、一月を口数も少な
く、かけまわった。

いく晩か徹夜^{てつや}して、やっと卒論をしあげて、二、三日すると、私は身心ともからになって、く
たくたという気がした。そして、とうとう、ある夕、ごはんもたべずに寝こんだ。ひと眠りして、
汗^{あせ}びっしょりかいて、夢ともうつともなくうつらうつらしていると、茶の間に順ちゃん^{あせ}がきた
らしい。

「トモ子は？」

「寝たのよ。かぜらしいの。」おねえさんが言った。「ねむったから、しずかにしてね。ここしば
らくむりがつづいたから疲れたんでしょ……、カキモチ焼く？」

「うん！」と少年のように。

カタコト、家庭的な音がして、やがて、ぶーんとおもちの焼けるにおいがしてきた。

おねえさんが、しんみりとはじめた。

「ね、順ちゃん、いつかあなたにお願いしようと思ってただけど、これから少し、とも子を外
につれだしてよ。さっきアスピリンのましたら、すうすう寝こんじゃって、その寝顔見てたら、
かわいそうになっちゃった。あたししたら、まるで^{*}清教徒に育てちゃって……」

「なんだか、小さいころとずいぶんかわったね……」

⑤ 「ちがうのよ！」おねえさんの声が、大きくなった。「焼けたわ。」

ポリポリ、カキモチをかじる音がおこった。

「少し前まで、もっと明かるかったの。もつとわがままで……かわいかったの……」

⑥ 私の目から、お湯のような涙がころがりおちはじめた。

「なんだか……あなたがきてから、かわったみたい……」

「なんだい、ぼくのせいにして！」

「でも、そうなんだもの。いままで、ふたりつきりで、まあ、あの子だいいじにって育ててきたで
しょ？ だのに、このごろは、のけ者^{*}って気がするんじゃないかしら？ 今度、かぜなおったら、
ダンスにでもさそってよ。」

また、ポリポリがはじまった。

「いや、これから、気をつけるよ。なんだか、まだ子どもみたいな気がしてしかたがないもんだ
から……」

「子どもだったって、もう二十一よ。」

「……とも子、おどれるのかい？」

「じょうずらしいわよ。このごろは、体操の時間にやるんじゃない？」

「ふん、体操で？……」

私は、頭のなかがクルクルまわって、

「私のだいたいな問題、カキモチたべながら論じないでよ！ 同情なんかしないでちょうだい！」と、ふたりのところへどなりこんだ錯覚さつかくさえもった。

その晩から、私は高熱をだし、ひと月寝た。夜と昼の見さかいつかない二、三日がすぎて生気にもどった時、私は、おねえさんの狂気きやうきじみた看病ぶりに、びっくりしてしまった。おねえさんは、Aと守ってきた日課をかなぐりすてていた。会社も休んだし、※らん費もした。ふしぎなことに、私は、⑦十も年とったようなおだやかな気もちになって、そのおねえさんを見るこどができた。「かわいそうなおねえさん。」私の病気を知ったマミーからは、毎日のように航空便がきて、枕まくらもとにたまっていた。それには、さりげなくニューヨーク郊外こうがいのおそい春のようすなどが書いてあったが、何か自分のむすこの心なしをわびているような調子があるような気がして、私にはしかたがなかった。

私、なにか、とんでもないこと、うわ言で言ったのかしら、私は思ったが、そんなこと、どうでもいいと思った。

はじめて、からだをおこした日、順ちゃんは私を抱だいて、縁えんがわの籐とういすまでつれていってくれた。

一月ぶりの日光がしみわたって、からだがあがりそうだった。

「どんな？」おねえさんが聞いた。

「いい気もち……、このまま、天国までのぼっていきそうだ。」

「ばかね。」天国にいく私をひきとめるように、おねえさんは、わきに坐すわって私の手をにぎっていた。

「もうすぐピンピンだよ。なおつたらね、とも子、ダンスにでもいこうか。」順ちゃんが、わきからのぞきこみながら、言った。

「順ちゃんたら！」私は、ほんとおかしくなってしまうて、キャッキヤッと笑いだした。「いやだわ、カキモチくらいで買収されて……、だいじょうぶよ、あたし、やっとこれで※小学は卒業しました。」

(石井桃子「春のあらし」より)

※プリンス・チャールディング……理想の花婿はなむこ。

※悪罵……ひどい悪口。

※清教徒……ここでは極端につつしみ深く潔癖けつぺきな人のたとえ。

※らん費……むだづかい。

※小学……「小学校」の略。

問1 「A」に入る四字熟語として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。
1 十年一日 2 一日千秋 3 一心不乱 4 十人十色

問2 線①「あの中に順ちゃんがとじこめられている!」という表現には、「私」のどのような気持ちが表れていますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。
1 順ちゃんに会いたいのになかなか会えないことへのじれったさ。
2 順ちゃんに何かあったらどうしたらよいだろうかという悲しさ。
3 順ちゃんが自分に会いに来られないかもしれないという恐怖感。
4 順ちゃんがすぐ近くにいることによりわき上がってくる高揚感。

問3 線②「眠り姫の私」という表現は、どのような「私」を表したのですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。
1 順ちゃんがいなくて怠惰な生活を送っている私。
2 順ちゃんが帰国するのを長い間待ち望んでいる私。
3 順ちゃんが帰ってくるのに合わせて準備している私。
4 順ちゃんがいなくなってふてくされて生活している私。

問4 線③「私の世界に、なんとという価値のテントウがおこったのだろう」とありますが、ここでいう「価値のテントウ」とはどのような状況をさしていますか。次の説明文の空らん
1 〃 3 にはあてはまることばを文中からそれぞれぬき出して答えなさい。ただし
1 と 3 は五字以内、2 は一字でぬき出すこと。

・ 1 が 2 から、3 に移ってしまったこと。

問5 線④「コブ」とはここではどのような意味ですか。考えてひらがな五字で答えなさい。

問6 線⑤「ちがうのよ!」とありますが、「おねえさん」はどのようなことを言いたかったのですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。
1 「順ちゃん」は「トモ子」の悩みをまったく理解できていない、ということ。
2 「トモ子」が小さい頃とかわったかどうかは問題ではない、ということ。
3 自分が「トモ子」の育て方を完全に間違ってしまった、ということ。
4 自分が「トモ子」の気持ちを踏みにじってしまった、ということ。

問7 — 線⑥「私の目から、お湯のような涙がころがりおちはじめた」とありますが、この涙はどのような涙だったのですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 「順ちゃん」に悩んでいることを知られたことへの涙。
- 2 「順ちゃん」に対して悪いことをしたという後悔の涙。
- 3 「おねえさん」と「順ちゃん」に対しての焼きもちの涙。
- 4 「おねえさん」が「私」の悩みに気づいていることへの涙。

問8 — 線⑦「十も年とつたようなおだやかな気もちになって」とありますが、ここでは「私」の気持ちに整理がついたことが表現されています。同じように「私」の気持ちに整理がついたことを比喩的に表現している部分を文中から十字以内でぬき出しなさい。

問9 この文章のタイトルは「春のあらし」です。このタイトルは具体的にはどのようなことを表していますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 「順ちゃん」の帰国を発端に「私」の気持ちはさまざまに乱れるが、人々との結びつきを再確認できた結果、「順ちゃん」と「おねえさん」の二人の関係を認められるようになったということ。

2 「順ちゃん」の帰国を発端に「私」たちの生活が大荒れとなったが、「私」が体調を崩したことによって、最後には「おねえさん」と「私」の関係が修復できたということ。

3 「順ちゃん」の帰国を発端に「私」は「順ちゃん」へ恋心を抱く中で成長を遂げていくが、その結果、「私」と「おねえさん」の関係が大きく乱れてしまったということ。

4 「順ちゃん」の帰国を発端に「私」は「順ちゃん」に恋心を抱き「おねえさん」は大いに混乱するが、最後には「私」の精神的な成長により二人は打ち解けられたということ。

5 「順ちゃん」の帰国を発端に「私」の思いはふくらんでいくが、「おねえさん」の「私」への心遣いを感じ取ることができたことで、最後には「順ちゃん」と距離を置く決意ができたということ。

(問題は次のページに続く)

3 次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。

ベランダの干し柿^{ほがき}

ベランダの軒下^{のきした}に
吊^つるしてあった干し柿

① 昨日食べてしまった

青空^{あそら}だけが 寒^かく輝^{かが}いている

毎日 日の当るところへ

つり変えたり

② 雨もようだと

奥^{おく}の方へ入れたり

皺^{しわ}になって黒ずんできて

白いものが日ごとに増えてくると

もう食べられるかなと

③ 少^{あま}しずつ 甘^{あま}い思いが満ちてきた

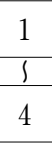
待つ楽しみの実が

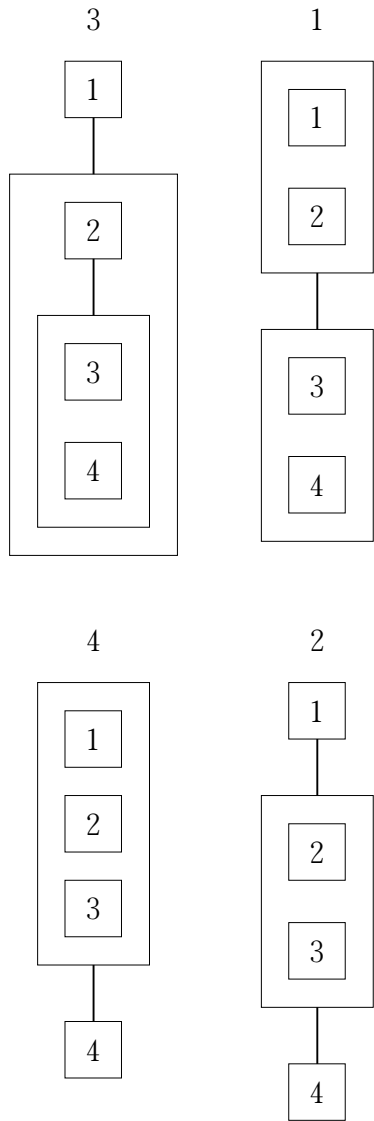
消えてしまった

④ 心^{こころ}に 空^{あか}白^{しろ}の塊^{かたまり}を

食べてしまったようだ

(斉藤明典『逆巻き時計』より)

問1 この詩は四つの連からできています。それぞれの連の関係を表したものととして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。なお、は連番号を表します。



問2 この詩で使われている表現技法とその効果の説明の組み合わせとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 「いんゆほう隠喩法」—— 難しい表現にいいかえることで、読者に意味を投げかける効果がある。
- 2 「たいげん体言止め」—— もの名で言い切ることで、そのものを強く印象づける効果がある。
- 3 「ぎじんほう擬人法」—— 人間以外のものを人に見立てて、表現を生き生きとさせる効果がある。
- 4 「はんぷく反復法」—— 同じような句を重ねて用いることで、リズム感を生み出す効果がある。

問3 —— 線①「青空だけが 寒く輝いている」とありますが、この表現の説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 「青空」は実際の景色ではないものの、作者の気持ちを表している。
- 2 「青空だけ」という大げさな表現が、読み手にユーモアを感じさせる。
- 3 「寒く」ということばが、冬らしきとともにさみしさを印象づけている。
- 4 「輝いている」からは、干し柿ができてほっとしている心情が読みとれる。

問4 —— 線②「雨もよう」のここでの意味として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 いまにも雨が降りだしそうなようす。
- 2 雨が降ったりやんだりしているようす。
- 3 しとしとと雨が降りつついているようす。
- 4 雨が降ってきたかどうかかわらないようす。

問5 ——線③「甘い思い」とありますが、ここでの「甘い」の意味・用法に最も近いことばを
ふくむ文を次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 他人にきびしく自分に甘い気持ちであらためるよう決意をする。
- 2 相手を甘く見てしまったために大切な決勝戦に負けてしまった。
- 3 ドアのねじが甘くなってしまったために業者に修理をたのんだ。
- 4 おやつメロンの甘いかわりに気がなって勉強が手につかない。

問6 ——線④「空白の塊を／食べてしまった」とはどういうことですか。その説明として最も
ふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 ベランダに干していた柿がようやく食べごろをむかえた。ところがいざ食べようとする
と、急に食べるのがおしくなった。「空白の塊を食べる」とは、このような柿への愛着が心
に生まれたことを表している。
- 2 ここまで毎日のように手をかけてきただけに、干し柿ができたよろこびは大きかった。
「空白の塊を食べる」とは、柿を食べてしまったことによって、そのよろこびまでも失わ
れてしまったことを表している。
- 3 干し柿ができるまでは一日でも早く食べられる日が来ることを願っていた。「空白の塊を
食べる」とは、そのように食べることを心待ちにしていた柿が目の前から消えたさみしさ
を自覚したことを表している。
- 4 大切に干していた柿を昨日食べてしまった。そこではじめて、食べるよろこびよりも待
つよろこびのほうが大切だと気づいた。「空白の塊を食べる」とは、待つよろこびを失った
ことへの後悔^{こうかい}を表している。

(問題は次のページに続く)

4 漢字の部首は漢字の構成要素です。その性格は二つあり、形を作る要素であるとともに、漢字の意味を表す要素でもあります。中国の清しんの時代に作られた「康熙字典」という字書では部首の意味を重視した分類が行われました。次の漢字群の中には、部首の意味を重視した時、部首の異なる漢字が一つあります。その漢字を答えなさい。

例 こめへん：穀物の穂ほの形に由来。穀物に関係することからを表す。

「粉・精・糖・料・粒」

【答え】料

(部首は斗(とます)。ものを量るという意味が強い。料理：量って処理すること。)

1 しめすへん：もとの形は「示」。神にいけにえを捧たかげるための台の形に由来。

「社・礼・視・祝・祖」

2 にく・にくづき：もとの形は「肉」。身体に関係することからを表す。

「勝・脈・胸・肥・育」

3 くさかんむり：草が並んでいるさまを表す「艸」が変形した部首。

「葉・暮・落・英・芽」

4 き・きへん：木の形に由来。木に関係することからを表す。

「株・札・末・果・相」

5 まだれ：家の覆おおい屋根の形に由来。家屋やそれに付属するものを表す。「麻」の垂たれに当

たるのでこのように呼ばれるが、「麻」の部首は「麻」。

「広・店・庫・応・庭」